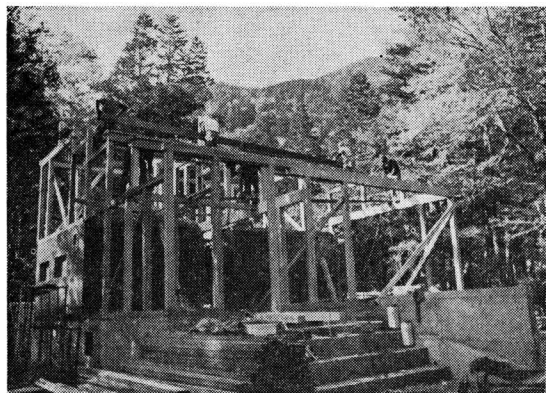


「エイ、エイヤ」「オウ」トン、ト
ン「バンザイ」
ヤ「オウ」
トン、トン。
棟嶺さんのお
祝のかけ声に
応じて、槌で
棟木が打たれ
トン、トンと
いうところが、
いびきが、
紅葉たけなわ
の、上高地の
森の中にこだ
まし、シャッ
ンと手を締め
て待望の山岳
研究所の上棟
式がどここお
りなく行なわ
れた。



山研委員 山崎 安治
さる七月七日地鎮祭をすまして着工した工事は、八月下旬、遅くとも九月中旬には上棟式をする予定になつていたが、その後、大雨などのため延び延びとなり十月八日午後五時頃上棟式という段取りとなった。

基礎工事は昔川原だったため、巨岩がごろごろと現われ、非常に難行したそうだが、まことにがっちりしたもので、これなら三階建てや四階建てのビルを作っても大丈夫といわれるほどのもの。すでにすっかり研究所の外組みは出来上がり、十一月中旬、雪がくるまでには九分通り完成といふところまで漕ぎつけた。

十月八日は午後二時上棟式を始める予定だったが、何にしろ今年最後の連休とあつて、松本からの上高地街道は文字通りのトラフィック・ジャム。いや、新宿から松本までの汽車さえ指定席も取れず、四時間以上立ちつめという有り様で、十一時半ごろ松本駅から安曇建設の車には中屋健二、林和夫、山本学治(設計者)のお三方に乗っていただき、小生と伊倉剛三さんはハイヤーで上高地に向かたが、釜トンネルのあたりから車は完全にストップ。やきもきしながら現場に到着したのが何と午後四時近くになってしまった。てっきり中屋さん一行が現場に先行して、宴たけなわと思いきや、伊倉、山崎の組が先になり、一日先行された安彦六郎さん、地元の高山忠四朗、早乙女緩次両氏に迎えられたが、穂高神社のお祭に行っていたという村井米子さんの姿もひっそり見え、遅い、遅いと大目玉をくらうします。

上高地の富永レンジャー、五千尺の藤沢さん、西糸屋の奥原教永さんも顔を出さず、しびれを切らしていたに違いない。中屋名誉教授一行を待ち切れず、四時から二階に上がっておごそかに式をすませる。二階から真北にこずえ越しに天狗岩が望まれ、真正面は六百山の岩峰が赤々と夕日に輝いてまことに気分は快適である。しめサバ、イカの丸煮、マスの焼きもの、ヨーカンなどごっそりご馳走のはいっただけをあげ、お神酒を飲み出したところ中屋さん一行三名がかけつけてきた。白骨、安房まわりのスーパール林道を通つたので五時間かかってしまった由。夜の西糸屋のイロリの間での二次会もまたまことに盛会であつた。

とにかく山岳研究所の工事は急ピッチに進められており、来年の雪どけを待ち、水道、電気、電話の工事をすませればいよいよ完成する。来年五月中旬には地元の人たちを招いて盛大な開所式をする予定である。

しかし問題は資金で、およそのメドはついているものの、水道や、トイレの工事などが予算を上回ることになりそうである。会員募集もまだまだ盛り上がってきてはいない。いまのところ

上高地山岳研究所の上棟式

山研委員 山崎 安治



昭和 47 年 (1972 年)
11 月号 (No. 329)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

上高地山岳研究所の上棟式	山崎安治	1
本文		
ネパール情報	丹部節雄	1
日本登山界への疑問	吉沢一郎	2
山と蝶のものがたり	春田俊郎	3
アンデス写真資料解説	田中 薫	3
追悼		
牧野平五郎さんの追憶	中田勇吉	4
名誉会員		
田部重治氏を悼む	成瀬岩雄	5
井本貴子さんのこと	久新大四郎	5
図書紹介		
シルク・ロード	松方三郎	6
いろいろばた	藤島敏男	6
アルプスの空の下で	宮下啓三	7
山なみはるかに		7
九洲の山と高原	日高信六郎	8
イラスト登山入門		8
会員通信		
ヒマラヤについて	薬師義美	8
立山の観光	大間知邦太郎	8
深田先生鳥海の花と答を		
お供えします	塩田良伸	8
便りを待っています	植村直己	9
アンナプルナ I 偵察	塚本茂樹	9
ジョン・ミュアと		
東良三さん	村井米子	9
会務報告		
岩永信雄氏をかこむ会	近藤信行	4
図書室便り、ルーム日誌		9
10月理事評議員会、新入会員ほか		10
お知らせ		10

ネパール情報

登山とトレッキングの許可範囲について

(在カトマンズ日本大使館
よりの連絡)

本件に関しては、これまでネパール政府の許可基準が明確でなかったため誤った観念のもと、トレッキングを拡大解釈して行動をとったと思われるものも見受けられた。今後、会のため登山許可発給機関である外務省およびトレッキング許可発給機関である入国管理局へ、それぞれの許可範囲について照会した結果、口答で主要つぎのとおりのお返事があつた。

(一) 登山許可とトレッキング許可はまったく別々のものであつて、許可申請の手続きからして根本的にちがっている。

(二) 登山もしくは偵察等正規の登山

上高地山岳研究所
募金状況 47・10・31 現在
※応募件数 三四六件
※金額 二、六四二、一〇三円
※目標額対比 五二・八％
予定額の五十％未満なので、まだ募金に応じていない方は、よろしくお願ひしたい。
なお、団体加盟の会からなども募金をいただき、明年使用の予約申し込みなど早くもあるが、予約申し込みは使用規定を設けてからあらためて考慮したい。(写真撮影・安彦六郎)

活動を行なうものは、当然登山許可を取得すべきである。

(三) トレッキング許可は、文字どおり山ろくをトレッキングすることを許可するものである。(許可する高度については、いちがいにいえないが、エベレストのB・C(五、三五〇m)は例外として、二、〇〇〇ft(三、六〇〇m)ぐらゐだが、トレッカーの安全限界を考えていることである。)

(四) トレッキング許可に指定された地点間のルートは、メイン・ルートによらねばならないが、道路事情等により若干これをそれでもやむをえない。しかし、外国人入国禁止地域に立ち入ることは絶対に避けねばならない。

(五) トレッキング許可で、エベレストのB・Cまで行くことを許可しているが、これは同地における登山活動を許可しているものではなく、観光を目的として同地を訪れることを許可しているものである。

〔註〕この通報自体、トレッキングの行動範囲の一種の規制といえる。ネパール側には、このような発言を求めざるをえなかった事情が存在したとすれば、まことに残念なことといえる。

やはりJACとしても会員でトレッキングに出かける人もあらうと思われるので今後留意して頂きたいと思ひこれにあえておしらせる次第である。

ネパール外務省登山担当官からの連絡

(一) 担当者の交代

この数年間登山許可の窓口であったG.B. Shah氏は、七月末法規関係を担当することになり、新しくやはりUnder Secretary of Narayan Das Shrestha (N.D. Shrestha)氏が任命された。

(二) 八月五、六の両日にわたり新旧両官と話し合い、そのうち特に必要と思われるものを次にお伝えする。

(三) 正式許可のない隊はネパールに來てくれるな

ネパール政府からの正式許可を取得しないまま、隊員が荷物をもってカトマンズにやってきて、政府に登山許可を要求することは、今後絶対にやめてほしい。また決して許可されないと思う。アプリケーションが三隊以上とまれば、ネパール政府としても、今後はできるだけ速かに委員会を開き、そのつどイエスかノーを明かにするつもりであることを申しそえたい。

(四) 日本隊と外国隊が、同時期、同一ピークで競合したばあい

日本隊と外国隊とが、同じシーズンに同一ピークで競合したばあい、日本隊が必ず不利な取扱いを受けるといわれてきたが、これは誤解である。決してそのようなことはないから安心してほしい。

(五) ネパール政府へ提出すべき英文報告書

これまで日本隊から提出された登山報告書は、カトマンズで作成された極めて簡単な英文のものであった。そして帰国後改めて詳細な英文のものが送付されたことは極めて稀であった。これでは、ネパール政府が、正式に英文報告書を受領したとはいえない。少なくとも帰国後出されるであろう日本文報告書の抄訳程度のもを送つてもならないとこまる。

(六) 三八座以外の山の解禁

徐々にではあるが、その努力は重ねている(現に八月末にはヤルン・カンジャヌー、カンパチェンの三峰が解禁となり、このほか一、二のピークの名

前もあがっている。などであった。ネパール側も、このほかに種々計画しているようで、これらもおおい具体化してくると思われる。いずれにしても、長い間とこおっていた登山許可が、最近になって一気に片づいたことは同慶のいたりである。

◆◆◆◆◆ 日本登山界への疑問 ——ルシアン・ドゥヴィの場合——

なお、両担当官から、「最近はいぶへってきてありがたいが、日本の登山隊で、私どもに贈物をされる方があるが、これはむしろ逆効果である。今後どうか私どもに精神的負担のかからないようにしてほしい」との依頼があったことをつけ加えておきたい。
(丹部節雄記)

◆◆◆◆◆

吉沢 一郎

注・この手紙はフランスの登山家ルシアン・ドゥヴィ(Lucien Desco)が、われわれの仲間、フォスコ・マラーニニ氏にあてて書いたものであるが(七二年五月二十五日、パリにて)、マラーニニ氏はそれを牧野文子さんを介して私に寄こし、適当な回答を、ということであつた。その回答はこの稿の後段につけておいた。

◆◆◆
イタリア山岳会誌「リヴィスタ・メシエ」に出た、日本の登山家達とその登山に関する、貴殿の記事を大変興味深く拝見しました。
私は東と西の宗教的並びに哲学的情緒の間にある深さへの洞察と比較に、特に注目すべきものがあると思ひました。

私はずっと、日本の登山家の決断力と抵抗性に強くうたれて来ましたが、しかし私にも一つだけ批判をしたと思う点があります。というのは、彼らはピトンと人工登攀術で勝ちとる場合が多いのです。彼らは初登攀の場合のみならず、他の登攀家が前に人工器具を使わずに登ったルートの繰り返しの場合

合にも、それらの使い過ぎが目立つからであります。

もう一つの問題は、私は毎年日本山岳会を出して、「山岳」を熱心に読んでいるものでありますが、その際にはいつも、現代の登攀家の山そのものと及び特に難しい登攀に関連した、真の日本人登攀家の精神面が何かわかるような記事がないかと期待していた、ということですが。

ところが残念ながら私はそれに類するものをその中に発見したことが一度もありません。私が読んだものは総て単純な技術的な報告ばかりで、深い興味を呼びおこすものは一つもありませんでした。

私はまた、日本の文筆家が書き、フランス語に訳されたものの中に、純粋な深い、詩的なそして哲学的な態度を反映するようなものにぶつかったこともありません。

勿論、どんな言語にしろ、特に「山岳文学」といふもので、真の文学として最上級に達したものが無いということも一つの事実であります。

ですが、少なくとも、西欧の山岳文筆家のある作品の中には、非常に高い

水準に達しているものもあります。(付記・マラーニニ氏)

以上のような手紙をフランスの友人から受取りましたので、何か返事をしたいと思ひます。差当り、翻訳されたものでもないものでよいので山や登攀について書かれた、優れた日本の本の書名を二、三お教え下さい。そうした本を訳して、西欧の登攀家達にわかつてもらうには、今が良い機会ではないかと思ひます。

× × ×
以上に対し私は下手な英文だが、次のような内容の回答を帰国寸前だったマラーニニ氏当てに投函しておいた。

先日、牧野文子さんから、貴殿の書いた、アルプス、ヒマラヤその他の山域に於ける日本の登山活動についての優れた概説記事が載っているリヴィスタ・メシエを頂きました。その中にたまたま、ヒラリーと私が並んで立っている写真を見出し、大変な喜ぶことと喜んでおります。さてあの有名なフランスの登山家であるルシアン・ドゥヴィ氏から貴殿にあてた手紙を拝見し、日本人の登山態度、特にヨーロッパ・アルプスで活動している日本人登攀家のそれについての質問のあることを知りました。

逆説的に言えば、日本の若い登山家は現在日本内地ではそんなにピトンなどを沢山使っていないし、その必要もないのです。というのは何処へ行っても、前に打ってあるピトンやボルトが必要以上にあるからであります。

しかし実を言うと、ドゥヴィ氏がその手紙の中で言っていることには一応の理がない訳でもありません。私自身も、日本の一部の若い登攀家達の安易なやり方を、いささか苦々

しく思っている一人なのであります。(自由登攀で登れるところを人工登攀で登る、それは曲芸師のやることと余り変わりありません)

私は登山家と単なる登攀家の間には厳しい線を引いています。登山家とは登山を全体として把握している人のことを言いますが、登攀家とは人工登攀は見事にやっつてのけても、登山は全体的に知らない人のことを言うのであります。(そういう人は登攀が済んだから登山の部分でやられることがままあります)

「山岳」は外国人のためというより、日本語の読める人(主として日

明治三十八年の八月、武田久吉は八ヶ岳に採集登山を行なった後、白馬岳に足をのぼし、多数の高山植物を持ち帰ったが、武田は高野鷹蔵の感化で、この年には捕虫網を持って蝶も採集するようになった。武田は八月中旬白馬岳の頂上に達し、頂上近くで網を振っていくつかの蝶を捕えた。武田は蝶については全くの駄け出しで、名前もわからないため、採集品はすべて蝶の専門家である高野に提供した。高野はこれの中で一匹の不思議な蝶を見つけた。それはベニヒカゲによく似ているが別種のように思われた。ベニヒカゲという蝶は既に浅間山、白山、八ヶ岳の海拔二千m近くから上の高山帯に産する蝶として知られていたが、これに似た別の種類だとすると日本では未発見な種類に違いない珍しいものということになる。

高野は武田に「どうも日本では未知の名前のない蝶らしいぞ」と告げ、びくびくしている武田に「何かよい名前をつけたら」と語った。武田は高い山にふさわしい名前をという考えに、高山植物に高嶺からとったタカネタミレ、タカネイバラ、タカネタンポ

本山岳会の会員)のために発行されています。そしてその中には登山の倫理や哲学について書かれた論文も多数含まれています。わが登山界にも多くの立派な哲学者がいて、立派な論文を書いています。が、他の言語に訳されたのは一つもないようです。

フランスと同様、日本にも世界に誇るに足る登山家で立派な詩人や芸術家が沢山おられます。同時に単なる弥次馬でしかない知的に貧困な登攀家の多数いることも事実でしょう。しかし私は日本の登攀家や登山家が総て哀れな弥次馬だとは思いたくなく

山と蝶のものがたり 6

高山蝶という新語

春田俊郎

武田の希望の通り日本名を「クモマベニヒカゲ」として『博物の友』六年三十一号に発表した。

この「クモマベニヒカゲ」を含めて高野は、既に高山地帯に産する蝶として知られていた「ベニヒカゲ」および浅間山の湯の平付近にのみ産すると思われていた「ヤマモンキチョウ」の三種を日本における高山蝶として『山岳』一年一号に記録した。高山蝶とい

いのであります。(尚、私は該当する本として、横さんの『山行』他五人の先輩の書いたものをあげておいた)



さる昭和四十七年三月十九日の第一回日本アンデス会議に講演を依頼され上諏訪の会場に行つて見て驚いたのは戦後五四の日本隊が出ており、その僅か一部にしろれた時間の報告ですら二日に亘る会議日程も時間不足に悩むという充実ぶりであったことだ。

アンデス写真資料解説公刊の勧め

田中 薫

そこで、主催者が私に求めたのはパタゴニア・アンデスの報告であったけれども、私は思うところあって、アンデス全体に対する学術的な概念と、私なりの目のつけどころといった話をした。それはすでに今後多数の隊が出ているからには今更と続々と繰り出されるであろう各隊にとって、何か共通な一貫した思考なり哲学なりがあった方がよく、それによって、やがて量の時代が終わって質の時代に入ったとき、日本隊がアンデスの国際的な研究に對し何かコンクリートな貢献が出来るのではないかと考えたからである。

二

各隊の報告をきいて感じたことは、少数の例外はあるが、概して基礎的なまたは初步的なアンデス概念の勉強が欠けていること、したがって系統的ではないにしても、実に素晴らしい写真が莫大な量撮影されていることであった。なかには撮影者が詳細なデータを添えれば貴重な学術的資料ともなるものが少なくなかったのである。

アンデスには戦後、かなり多数の学術調査が行なわれている。それは故泉靖一氏を頂点とする考古学、文化人類学上のものから、生物学、人類学、民族学などの各分野のもの、また東大の数年次に跨る気候学、地形学、水河周辺学、地史学を含む総合地理学的なものに及んでいる。地理学だけにしていえば、ドイツのトロール、オ

1 ストリアのキンツル両教授のように登山隊を統率する学者が出ていないのに、日本にはどういいうわけか登山家である地理学者が少ない。したがって、高いところ自身登って写真撮っている例がある。もし日本アンデス会議の写真が専門家の手に入れば、それは学術資料となるばかりでなく、その解説を見て撮影者達が啓発され、相互に利するところが多大であるにちがいない。

三

写真がいささか死蔵されている感があったので、私は吉沢一郎氏に写真の公刊を提案したところ、早速とり上げられたことは嬉しい。

さて写真公刊の方法であるが、カラー・スライドを幾セットか作るのも悪くはないが、印刷された出版物にしく

はないと思ふ。写真集の形式にするが、決して豪華なものにする必要はない。カラー価値のあるものはカラーで、あとはモノクロでできるだけたくさん取り入れた。整理・編集にはテーマ別と地域別とが考えられるが、最初は地域別が容易であり無難であり、有益であると思う。何故ならアンデスのような南北に長い山脈は、部分的にたいへんな相違のあることを先ず知らしめる必要があるからである。

写真は各隊から公募し、編集委員会

岩永信雄氏をかこむ会
名誉会員・岩永信雄氏が四百点をこえる蔵書を本会に寄贈くださったことは会報でお知らせしたとおりだが、そのご厚志にこたえて、九月三十日、氏をお招きしてお話をうかがう会が催された。

横濱に成人された岩永さんは、明治末年におこなわれたウェストンの講演をきいて山に開眼された。初期会員、北沢基孝氏(会員番号十二番)の紹介で大正七年に入会(六二八番)、三ツ峠や黒部溪谷のバジオニアとして活躍された。積雪期の朝日岳に足跡をのこされた方だが、席上、大正期から昭和初期にかけて、冠松次郎、沼井鉄太郎、別宮貞俊氏らと同行された山行の想い出を語られて、参会者一同、ふかい感銘をうけた。氏は往時の記録的な写真を持参され、また黒部再訪のカメラスライドを映写された。そのお話は、全生活を山にかたむけられた氏の情熱がほとほと著るものであった。

参会者の方々からのお話をひろうと成瀬副会長は「省線で六郷川の鉄橋をわたるとき、白峰三山の見えるときがあるのですが、窓ガラスをこすって山を熱心に見ようとする二人の男があった。それは北沢さんと岩永さんだった。そうぞう」とお二人の思い出をユニモラスに語られ、島根康郎氏はお嬢さんの学生時代の教師としておつきあいをしていたが「岩永さんは山以外のことはなんにもお話しにならない。高校時代、池田勇人や佐藤栄作と同級だったそうですが、そんなことはちつともおくびにも出さない方です」と氏の人物の一端を語られた。この岩永さんの会のお

牧野平五郎さんの追想

富山支部長 中 田 勇 吉

大先輩には先生呼ばわりする方もありますが、牧野さんは「さん」付で呼んで少しも不自然でない存在でした。われわれとは親子以上の年令の隔たりがありましたが、いつも気軽に接することの出来る方でした。長い経歴を物語るものとしてわたしは葬儀のときに読んだ弔辞を揚げごめい福をお祈りいたします。

弔辞

合掌

わたしたち山岳愛好者が育しく慈父と仰いでいました牧野平五郎さんが、ちょうどお盆の十五日午前八時三十分

会合で和服姿の牧野さんにお会いしたのが公の席へ出られた最後になってしまいました。あの時はご老令とはいえないまだ元気であったのに、誠に突然のご逝去におどろきました。

大正十二年一月に、横さんをリーダーとする厳冬期立山の松尾峠遭難がありこの遭難救助に尽力されました。翌十三年五月には故秩父宮殿下ご一行の案内役として積雪期の立山ヘスキー登山をされています。

昭和三年には、富山県体育協会の設立に併せて山岳部門を担当するため、越中山岳会を創立して自らその会長になられたのであります。越中山岳会が富山県における山岳団体の草分けであります。その後これを日本山岳会の支部に昇格しようと努力されましたが、戦時となり昭和二十三年三月の戦後にいたりようやく日本山岳会富山支部が創立され、元老としての会の育成にあたっていたいただきました。同年七月には支部を中心として県内山岳団体を統合し、富山県山岳連盟が結成され、

その会長に就任していただきました。老年に向かわれるにしたがい自然愛好の気持はますます強くなられ、昭和三十三年四月には富山自然保護協会を設立され、その会長として特に立山の自然を守るために力を尽され、なかなしく立山ルートの建設については、県や開発会社に厳しい注文をつけて現在にいたつたのであります。

また、昭和四十年頃より山岳遭難の多発を大変心配され、横さんとともに若い登山家の育成のために文部省登山研究所の開設を働きかけ、わが国唯一のこの機関を、立山千ヶ寿原に誘致しこれが実現をみるにいたつたのであります。晩年は、さらに県内の自然保護を考えられ果敢に公園の指定に關しては自ら総ての箇所を詳に回られ、決定されたのであります。

これらの業績から、昭和三十八年には厚生大臣表彰を、翌三十九年には勲四等瑞宝章を受けられ、昭和四十二年

な気がする。「青春の挫折」を論ずると必ず付随する感傷がないとはいえないにしろ、志半ばでヒマラヤに近づいた井本さんを想うとき、そういった感慨が強いのです。

井本さんが学生部の仕事に携わったのは、三年前、彼女が上智大学二年生のときです。以前僅かの付き合いでしたが、折にふれ井本さんの人柄を感じさせられた一年間のように思い出されます。四十四年度の活動は、年報発行等の従来の仕事ばかりでなく、全日本学生山岳連盟の結成準備などで例年に劣らず多忙を極めた年でしたが、彼女はガサツで時間感覚に乏しい役員の中にあって、書記という役割を越えた仕事をりをみせてくれました。

あの誠実さと意志力、情感の濃やかさは何処からくるものなのか、グウタナ我々には不可思議に写ったものですが、今になって成程とうなずけるのです。聞くところによると、幼少の頃より優良児として賞されるほど健康に恵まれ、中、高校時代には古典音楽に耳を傾けるといった、活達かつ物静かな一面を持ったお嬢さんであったそうです。責任ある行動、人柄は、ご両親の影響を強く受けているとも聞きました。

そして上智大入学、山岳部入部となって山登りに魅せられたのでしょう。経験を積むにしたがい東京近郊の、又東北、北海道の山と、合宿以外にも活発な山行をされていきました。音楽などもモーツァルト、シューベルトから、バッハの宗教曲へと幅を拡げ深みを増していた時期であったように感じられました。著名な音楽家が来日した折には、足繁く上野へ通われていたことを覚えています。

いろいろな面で著しい進境をみせ、意欲的になっていた井本さんにしてみれば、山岳会という刺激の多い場での

仕事を通じ、「一度はヒマラヤへ」という願望が、具体化の道をたどるのにその時間は要しなかったのでしょうか。その実現が、今回のインド、ネパール行だったのです。

ディオチバ登山そのものにはいろいろ問題もあるでしょうが、それは論外にして、私には山登りを絆に彼女と何らかのつながりのあった人達の中に今回の不幸に関し、責任感じたものが一様に感じられるのです。現在の大学山岳部、日本山岳会に、女性の山登りに対するエネルギーを正面から受け止め、吸収できる態勢が果して用意され、吸取できる態勢が果して用意され、アルプス、ヒマラヤと、やたら刺激だけは与えられ、それに見合った受け入れ態勢を見出せなかったように思えます。責任感じたもの、私たちが求められるような気がするので。

ルームの戸を開け、エレベーターの縮小模型が目に入る度に、寸法図にとらめっこしながら、粘土を塑んでいた井本さんのことを思い出します。この秋からは専門であった動物心理学を過ごし、ある研究所の任に就かれる筈であったと聞きます。多方面にわたって、その人柄、才能を存分発揮されたであろう故人を思うと、返す返すも悔やまれたいですね。

僅かの間でしたが、共に山岳会の仕事に携わっていた一人として、今は自然児となって、ラリガラスの花に囲まれヒマラヤの空に遊ぶ井本さんに心からのご冥福をお祈りする次第です。

(久新大四郎記)

おまたせしました、「山岳」第六十六年は近日中にできあがる予定です。主な内容は会報「山」三二四号九頁をご覧ください。

図書紹介



宮下啓三画

シルク・ロード

深田久彌著

作家として幾つも仕事を遺した深田君を山の面からだけ取上げてはならないのは当然のことだが、山の方面で遺した著作だけを見ても、これだけ著述を残した人は、殆んど類がない。こんなことをいふと「おれは作家なんだから、当然だよ」と深田君はいったかも知れない。文筆をもって立つ以上小説であっても旅行記であっても区別をつけたいというのであったろう。とにかく、深田君が優れた登山家であったことは、ぼく達にとっては有難いことだった。深田君の遺した数々の山関係の述作に接するたびにその感を深くすると、同時に、深田君の死がぼく達にとって、どんな大きな損失であったかも知るのである。

ヒマラヤと同じように、その延長である中央アジアは、深田君にとっては「ぼく達の仲間誰にとってもそうであつたように——長い間のあこがれの土地であつた。だが大概の場合、話はそこで終っている。ところが深田君はへそくりを蓄めて、自分でヒマラヤに行った。さらに足を延ばして、シルク・ロードの旅をすること再三におよんだ。それだけではない。大金を投じて

スタインの「セル・インディア」を手に入れたりした。ヒマラヤ、中央アジアの文献に関する限り、後と先きの顧慮をすることなく産を傾けて悔いなくつた。ここまで行く普通の人間はもう置いてきぼりなのである。

ただ、まことに幸いことに、深田君は作家であり、類い稀なストーリー・テラーであつた。お陰でぼく達は深田君なき今日なお、あたかも生きている深田君から直接話をきくような気分持で、楽しく、その旅行談に耳を傾け文獻渉猟の成果を聴くことができるのである。

早い話が、この「シルク・ロード」(角川選書)である。

話しぶりは、まさに深田君そのものだ。深田君がどんなにその旅を楽しんだか、それが直接読者の心に伝わる。全てが旅行談ではない。書物を通して得たその土地の歴史や地誌を、深田君が要領よくまとめて話してくれる場合もある。しかし、深田君は明らかに楽しみながら、時には興奮しながら、それを語っている。そして聴くものは安心して深田君の話に耳を傾けていいのだ。生じつかの知識を売っているのではない。大袈裟にいえば命とかけがえにせぬばかりで手に入れた大切な文獻を、精魂を打ちこんで読みくだいて、それを語っているからだ。

深田君はいくたびかシルク・ロードについて語っている。著作目録によると、単行本で出たものだけでも五つ挙げられている。そしてこの「シルク・ロード」は四十七年八月初版とあるから、これが最近のものになるが、内容は一度新書判で公けにされた「シルク・ロード」をその第一部に載せ、中央アジア関係のそので、これまで単行本に取上げられなかったものをまとめたその第二部としたもので、かつての中央アジア旅行の同行者であった長沢和

俊氏の編になり、同氏の解説を付けたものである。巻末の「著作目録」も大変役に立つが、挿入された写真や地図も、それぞれに役割を果している。

ぼく自身としては——日本人として当然の話だろうが——第一部の物語は極めて身近な思いで耳を傾けた。「トルファン」の馬、ハミの西瓜」ではないが、何としても東半分の方は肌を感じ方が違う。西半分になると一足飛びにアラビヤ・ナイツの世界、それが汽車が出て来た飛行機が飛んだりするので若干当惑したり、「暗殺者の谷」の物語や「鉄の門」の戦争話で夢の世界に遊んだり、とにかく深田君の物語は一通りのものではない。

たった一つ、蛇足だ加える。九二ページに「露探」という言葉が出てくる。深田君はどっちを考えていたか、今となつては確めようもないが「露探」はロシア側のスパイだろう。ぼくの方が深田君より少し年上だから、日露戦争当時から言葉が使われていたことを憶えているのである。

いろいろ

南会津山の会著

「みなみあいづまの会」という少し発音にくいこの会は、昭和三十三年に発足したとあるから、まだ若い会である。会員も年若い人が多いようにおもわれるが、南会津の山への打込みよりは民事でない。東京在住の会員も見受けられるが、大部分は地元在住の会員であらう。

この連中が執拗に、自分たちの山を谷を、そしてまた民俗を、地の利に乗じ四季を通じて探り登り採集した成

果が、ここにまとめられている。しかし今更がきにもあるように鹿爪らしい研究といったものでなく、会誌「いりばた」に気楽に執筆発表されたものだけに、読者は耳慣れぬ名をもつ山や峠や、古くから残る祭礼や踊りを、或は珍らしく或はなつかしく読みとることができるところであらう。

挿入の写真は大勢の会員の収獲からよりすぐったものだけに、どれをみても見事だのしい。文章によらないでも、南会津の風物や習俗が写真を通じて読者の心にせまってくるといつても過言ではあるまい。

本書を綴りて感じたことは、会員が会津の山に身も心も融けこんで、高度が低くても岩場が物足りなくとも、自分たちはこれでいいのだ、これがたのしいのだという、しつかりした考えを持っているという点である。

訊いてみないことには分らないが、この会には恐らく、いつの日か海外遠征を自分たちも、というような空気がないのではあるまいか。無理に背伸びをして海外遠征に出かけるのもいいが遭難事件を起こすなどは、箔がつくどころか、なんのプラスにもならない。地面に足のついていない背伸び遠征などに、気をとられないでいりりばたの続篇にじみな努力を望みたい。

行文の中に同人雜誌的な会誌からの転載のためである、仲間の愛称や、仲間の慣用語で第三者に通じない用語が、処どころ目についたが、公刊の場合には改められるべきであらう。

造本はこまかく気がくばられ、好ましい出来栄、ながく書架に愛蔵されるべき書物である。

(一九七二年九月三十日記 藤島敏男)

B二四四り版 三一八頁 色刷画一葉 写真四八葉 一九七二年七月 若狭堂刊 定価一九〇〇円 限定版 一五八部 八五〇〇円。

アルプスの空の下で

近藤 等著

山岳紀行を書くということとは、けっして容易なことではない。それはしばしば山に登ること自体にまぎる困難さをもっている。なぜならば、著者と同じ体験をもった者あるいはこれらに感情移入が可能であるとしても、大多数の読者にとっては、山行記録はおよそ自分と縁遠い物であるからである。そのような無縁な読者のために共通の地盤をつくらうとする著者は、ややもすると哲学めいた思考をふんだんにまきちらそうとする。具体的で一回かぎりの山行を、哲学めいて気の利いた言葉によって普遍化しようとするのである。そのあげく、山岳紀行は登山哲学の書になりかねない。それがいいやない。他人に同じ体験をゆるすまいとする、誇りと優越感にみちた文章が生まれる。だが、登山家が自分の山行を我慢するくらい鼻もぢないものはない。十八世紀に、それまでは悪魔の巣として恐れられていた山岳に美を見出して、登山することの意義を世に広めようとした人々の時代があるならば、うしかに山岳紀行は哲学でありえたらしく、十九世紀におけるスポーツ登山の初期であれば、山行はスリリングな冒険談の材料になりえたであらう。

山岳紀行家は、哲学者ぶることによって、自分の意志に反して俗物と化しているいはまた冒険家を僭称することによってナルシズム(自己陶醉)におちいり、どちらの場合にも、多くの読者の共感を得ないではないだろうか同時に少なからぬ読者に反感をいだかせるものである。

非俗をてらっているくせに結局は俗物性を露呈してしまう哲学者気どりの山岳紀行家でもなく、冒険家気どりのナルシストでもない人の山岳紀行とは何か? それのきわめて幸福な実例が近藤等氏の新著「アルプスの空の下で」であらう。これはまことに爽快な登山記録である。もちろん、哲学臭とナルシズムとを持たないがゆえに。

この書物は、「一九六八年のアルプス」、「一九七〇年夏のアルプス」、「一九七一年夏のアルプス」の三部から成っていて、計二十六の登山の記録をおさめている。A六版の体裁で九ポイントの版組ということは、ゆとりのある比較的大きな活字で組まれた、読みやすい本であることを意味している。このようにおらかな組版でありながら十ページをこえる量をもち山行はただの二つしかない。誇張好きの自慢家ならば、これらの山行の三つか四つばかりで一冊の本を仕立てあげてしまいかねないであらうからこそ、このことは注目にあたいする。

シャモニーを基点として、スイスのベルン高地の山々や地中海沿岸にそびえる岩壁をもふくめた広い地域を舞台にして、近藤氏はおどろくほど虚心坦懐に岩登りをたのしんでいる。しかし氏の登山は、下界の人間たちのさわめきに対する反感からおこなわれるわけではない。人間との交際のわずらわしさから逃れるための登山ではなくて、逆に、人間とのふれあいをたのしむための登山なのである。ガストン・レビュフやドミニク・ブランシエなどの良き山友をもつて、彼らに全面的な信頼感を寄せることができたからこそ、はじめて可能になった登山なのである。これらのすばらしい達人たちについて、これらたぬきで、危険を感じることなく登山を満喫した氏のよるこびが、この書物のすみずみにまで行きわたっている。友人への信頼感に心満たされて、氏はすべてをやすやすと受け入れて、孤独な哲学の瞑想にふけることさえ忘れたかのようである。

氏にとって、山はつねに美しく、女性にはつねに若々しく魅力的で、飲むもの食べるものすべて美味。私はこれほど大らかな山岳紀行を他に知らない。一部の読者は、じつは本書を感じるかも知れないが、じつは本書の魅力がここにあらう。山行は純粋な遊びなのであって、著者はそれ以上に何一つ特別な意味を与えようとしていない。そうであるからこそ、読者は著者ととも山行をたのしめるのではあるまいか。

山行のそれぞれにコース・タイムがさりげなく付記されていて、巻末に登山ルート図集がまとめられている。氏の個人的体験を、後輩たちのガイドとしても役立つような心惜いほどのしかし、それだからこそ本書をひもとくよるこびを倍加させる配慮がなされている。

こまかなことをいえば、読者の心はずませる本書に瑕瑾(小さな欠点)がないとはいえない。アイヌ・ステイヒルはシュティツヒル、ローターはロートターが原語音の正しい表記である。そして、私が著者に問いたいのは、一五四ページから一五五ページにかけての次の記述についてである。近藤氏は、「左手はるか遠く、スイスのオーパーランドの山々、ふり返るとワリスの山々が地平線に浮かび出ている」と書いておられる。これはシャルドネ針峰北壁中央側稜の登攀についての記録にみられる文なのであるが、北壁を登って左手にペルナー・オーパーランドの山々が見えることればワリスの山々が背後に見えることは絶対にありえない。位置的には「左手前方」であるにちがいない。なまじ私がかつてスイス・ヴァレ(ワリス)州の高地

で、モン・ブラン山塊を朝な夕なに見て、すじからこそ気にならざるをえない文章なのである。

だが、わずかばかりの疑問点をあげることも私の本来の意図ではない。虚心にアルプスの山を攀じたる人の紀行文に、私自身が虚心にたのしみを共にしたことを強調したいと思う。「ダースほどのカラー写真とそれに倍する数のモノクロームの写真に興味をいっそう盛り立ててくれる。近藤氏自身の撮影によるもの他に、レビュフや白藤史朗氏等々の撮った写真が加わって、これまた『アルプスの空の下で』が友情の書であることを証明している。けれどアルプスの晴れわたった空の下に一刻をすくすくするような清涼感を味わいながら、私は本書を読み終えた。

昭和四十七年七月 白水社刊
合版 二二九頁 定価二二〇〇円 (宮下啓三)

山なみはるかに

三田 幸夫著

三田さんには、一九五四年に刊行された同名の著書があるが、これはその再刊ではなく、同書とそれについて出版された「遠い山遙かな旅」と「山のガキ大将」の三冊のなかから選ばれたものである。「山岳名著シリーズ」のなかの一冊ということで、旧著の題名が採用されたのだろうが、少々まぎらわしく思われる。選集としては大体三田さんの長い登山歴を年代順に追った形で、長短の文章がおさめられているので、若い読者には便利であらう。そして、著者の果した先駆者的な足跡を、後につづく若い世代がたどってみる上でも、役立つに違いない。

昭和四十七年六月 二見書房刊
四六四頁 三三四頁 定価五五〇円

九州の山と高原

代表著者 折元秀穂

十年まえに同じ表題のガイドブックを著わした会員折元氏が、今度は十二人の山仲間を動員して、九州の山と高原をたんねんに取りあげ、一五〇におよぶルートを選んで簡潔で行きどいた案内記をまとめた。初心者に対する適切な注意が添えられ、すべての山名にカナがふってあるのは親切だ。高原ドライブの手引きもある。

近ごろ九州全域(屋久島を含む)に車道や林道が開発されたが、これからはますますこの傾向は進むと思われるから、お手数でもなるべくたびたび改訂して現実即した好案内書として続けてほしいと、欲ふかい希望を申したくなる。

昭和四十七年七月 西日本新聞社刊
四六判 三〇一頁 定価 六五〇円

イラスト登山入門

文 横山 厚 夫
イラスト 松村 充

これは山登りを始めて間もない若い人々を対象に、『山と溪谷』に「入門／登山の知識」として連載されていたものを書き改めたものである。著者は「まえがき」の中で、「山登りでは自分で行うような場面にあいながら体を使っておぼえていかななくては、本当に身についたものにはなりません。技術を発揮するとともに頭を十二分に働かせて、予想外の事態をのりきつていくところにこそ、山登りのおもしろさがあるのです」といっている。イラストが大変上手く生かされていてユニークなものになっている。

昭和四十七年七月 山と溪谷社刊
A5判 一五一頁 定価六五〇円

ヒマラヤについて

— 私見を二、三 —

薬師 義美

本誌三二五号で白川義員氏が同氏著『ヒマラヤ』の吉沢一郎氏の書評に対して、著書の立場をのべられていた。当然、見解の相違も含めて、両者の主張の並行する部分があるのはやむをえないと思う。

それは別にして、やはり、若干のデータについて納得のいかない点があるのは、吉沢氏だけではなかった。ダウラギリ山群の七一七五mの「サワラヒマール」(七一九三m)として、初登頂もなされている。前者は古典的であるといえるだろう。一方で、最新のデータも盛り込まれているから、こんな類のクラシックなものはすぐ目立つのである。

次に、再版の際にぜひ訂正していただきたい点を二、三羅列する。私が自信をもって同定したものである。

第十三図「ラムジュン・ヒマール東麓」これは深田さんが亡くなる少し前に、世田谷にお訪ねしたとき、この図の小さなものを見せられ、一体、どこかの山だろう、と私にたずねられ、山名も解説の中で「実は向うの山がよく判らない」とされているが、これは「ダウラギリ主峰の東南麓」である。「向うの山はマナパティのグループ」である。当時、深田さんには即答できなかったけれど、第三図「ダウラギリ」の左方の尾根、岩場と雪、ヒマラヤひだを比較すれば、簡単に同定できる。

第十四図「アンナブルナ・サウス」この説明は、アンナブルナ・サウスを(右)とすべきである。左の山は「フ

アングとその南の峰々」であり、ヒウンチュリは見えない。一九六五年に私はゴラパニの峠から同定した。

第二十四図「ダウラギリ・ヒマール」左端の尖峰がサワラ(七一七五m)(七一九三m)にすべきである。

第三十五図「カトマンズ全景」の中では、レンボ・ガン(ビッグ・ホワイ・ト・ピーク)はドルジュ・ラクパ峰の陰に入っで見えない。矢印の地点はギャルツン・ピークなどである。

立山の観光について

大間知邦太郎

諸岡一兄の「立山黒部アルペンルート」の一文を拝見致しまして、五十年にわたる立山と取組んで参りました地元の一會員の私としては文末の「今後山岳会でも新たな見地から観光とのかね合云々」のご意見は同意し難く官や権力と結び立山とは似ても似つかぬ小資本力の所謂思わく事業家如何に現在の観光施設のレベルまで持つて行くことが難事であったか。思いつく観光施設の無駄が多かった事。一度取得されたみにくい物を取除きえず、そのまま等々を、日本山岳会代表として出席の方は思いめぐらして頂きたいと思ひます。山岳に対し愛情と高遠な理念の多い彼等はやがて剣岳薬師をも利潤の犠牲にするに否でないと思われまふ。

日本山岳会はこの意味で常に如何なる場合でも客観的な立場に立つて山岳に対する、愛情と、正念による理解をもつて発言すべきと思われまふ。一日

の通過や招待で意見を述べるべきではないと思ひます。一握りで崩壊する日本の山岳を、欧州アルプスやエベレストに比しての観光云々は三思して頂きたいと思ひます。日本の国土および日本の山岳は、珠玉乍ら如何にささいな非力の物体であるかを再吟味して頂きたいと存じます。(吉沢宛)

深田先生鳥海の花と

菅をお供えします

塩田 良 仲

あの帯紫紅色大輪のマンテマが矢島町公民館の草花の中で、平気で雨に打たれていました。お花を上げずにいてご免なさい。

蔵川までバスが入るんですよ。帰りは別な道なので窓を開け眼を瞇って行きました。何せ雨の黄昏、イワガラミ、オオカメノキ、ガマズミ(大亀の木より葉の深い)、ヨブシ、タムシバ(辛夷より花が反り返る)、ヤマボウシ(金槌の柄にする)と白ばかりです。

更けるにつれ、さすがの雨も日本一の酒田強風に掃蕩されてゆくのが枕に響く、枕は地酒(天寿)の瓶、ご想像下さい。

待望の六月十七日、大快晴、有難うございました。小屋はイワイチヨウ(岩屋敷)の大群衆の中だったんです。数十歩で砂礫地は終わり、あとは天辺まで雪田雪溪、さくさく行けばいいんです。そのはだれ(斑雪)の周り両岸は、もう火縄点火の仕掛花火、炸烈の出番を待っている、みんな大変なものです。さきがつけるはミズバショウリュウキンカ(立金花)と雪解のならいですが、あとの誰彼にはボットとなつてしまします。

コイワカガミ(古代鏡の葉、シヨウジョウバカマ(狸々袴)、ツマトリソウ

(棲取草、エンレイソウ(延齢草)、サンカヨウ(山荷葉)、コバイケイソウ(花が梅葉が紫蘭の意)、キンロバイ(金露梅)、マイズルソウ、ツバメオモト、オオバキミソ(ミソとわからない)、カヤツリグサ科やミソのむずかしい花々。雪に倦み最後を倉利坂に踏込むとコメバツガザクラ(米葉楊枝)、ガンコウラン(岩高蘭)、コケモモなどの急峻な岩岩荒原、雪溪に浮岩を振落している岫々たる七高山です。

ここからは岩伝い、緑は一切まだです。いったん雪にうずまつた爆烈火口の下り、最高峰新山登峰です。私にとって吹浦口や湯の台口から岩氷を攀じての登頂から約二十年振りの大物忌様木花咲耶姫様です。下手な祝詞で済みませんでした。しかもおさがり有難うございました。

棒ずりの棒を拾って来なかったので尻にりや四本爪で七ツ釜に戻り、雪消えかかる見返坂の尾根を辿りました。クロメノキ、ウラジロウラク(裏白瑛瑛)、ウラジロナカマド(裏白七竈)、ミネザクラ、ハクサンシヤクナゲなどの走り根の小径です。途中よく休みました。躍り出た怪獣がドッスンと札幌嬢のお尻にぶつかって逃げて行く「熊の森」の標識を見た辺で大事件でした。黒褐色猫より大です。

ゴゼンタチバナ(御前山橘)、コミヤマカタバナ、ツクバネソウ、チゴユリ、タケシマラン(竹緒蘭、ユキザサ、タニギキョウと樹陰にも目を凝らして「お花園」に下りました。アカヤシオリ(赤八塩燭)が咲き始めワタスゲが灯り、ニコウキスゲが周囲の疎林をあかろくしています。が、振仰ぐお山は雪の早春です。蘭の仲間はまだまだ。タカネニガナ、イワレンゲ、マンネンダサ、ゾダヤクシユ(信州方言で喘息の薬種)、タニウツギ、ホウノキとしんがりを勤めました。大千軒岳の谷の戸

の谷地で、「何だろう」と仰言った真黄色のオオバミソホウズキの群落、あれとそっくりの所に出食わしました。そこが発電所取入口の上で山歩きは終わりました。島海村サービスのマイクローバスが来るまで大曲の植物の先生に土地っ児が食べる果を教わりました。層蘇の材料が又増えるわけです。

花と香で見当が付いただけお供えます。素人の横好き、間違いを直して下さい。大好物精力剤のオゼネギ、アイヌネギが遂々見付かりませんでしたし申訳ありません。

便りを待っています！

植村直己

目的地グリーンランド北西海岸にあるチュレにつきました。流水、アザラシ、水、ツンドラ、海鳥、静かな自然の社会……とにかくエスキモー人と一緒に生活することになりました。六月に入った南部と違い、電気はもちろん文明色のない狩猟民族で、アザラシ、クジラ、鳥の生肉が主食。腹がすいたら食べるという生活です。

コペンハーゲンで白熊用の鉄砲を買いましたので、鳥をうちまわって練習し、大いに生肉にありついていました。言葉のできない同類がやってきたというので、ここでは大歓迎をうけています。大抵は十一月頃から始められそうです。気温は日に日に低くなり、マイナス一〇度近くまでさがります。私もエスキモー人になりそうです。何といっても日本からの便りが一番の楽しみです。いこうに参りません。お便りをお待ちします。

N. UEMURA, Thule (Qanah), Greenland, Denmark.

九月十一日 チュレにて (ルーム宛)

アンナプルナ

I 偵察隊について

信濃支部長 塚本茂樹

会報「山」六月号に掲載された「不法ではない我々の立場」の記述の中に多分に誤解を受け、又在日本大使館高山氏にご迷惑をおかけする記述がありましたのでお詫びと訂正をしたいと思います。

信濃支部の奥原隊は、ネパール政府関係機関の許可のもとに順調にキヤラパンを進めておりましたところ、毎日新聞に「不法登山云々」の記事が掲載されました。その後の処置および不法ではないということについては「山」六月の記述の通りです。私の記述の中で奥原隊長が使い出したシルバの持ち帰った返信が、ランジャン氏と高山氏から同一のものであるように受け取られる誤りを犯しておりました。ランジャン氏からの返信の要点は「貴隊が高山氏からの返信の要点は「貴隊の取得している許可にもとづいて行動して欲しい」ということでした。この点改めてご理解をいただきたいと存じます。

私共の連携の不充だったことから、大変誤解を招き、高山氏にもご迷惑をおかけいたしました。誠に申し訳なく思っております。今後彼地を訪れる方は、やはり許可の発給機関と充分ご相談されることをお願いいたします。

『山岳』覆刻版 好評発売中

ただいま第一年第二号、第一年第三号をルームにて発売しております。ともに三百部限定、頒価一八〇〇円(送料二〇〇円)です。ご希望の方は事務局までお申し込み下さい。第二年第一号は明年一月刊行の予定です。

ジョン・ミューアと東良三さん

村井米子

自然保護の叫びが各地で湧きおこっている今年は、アメリカの国立公園第一号、イエローストーン・ナショナルパークができてから百年である。九月にはそこで、国立公園の国際会議が行なわれ、奇しくも同じ頃に、国際自然保護連合の会議が、カナダのバンフ国立公園で開かれた。四年前インドで行なわれた時は私も参加したが、世界から集まった学者男女の熱心な議論ぶり会議後の視察旅行など有益だった。日本の国立公園制度は、すなわちアメリカのそれに依ったものである。ただしすべてがアメリカそのままではなく、狭い国土で人口の多いわが国に向くように、多少の配慮はしてある。かつ最近の開発過度による荒廃に対し、制度上にも改むべき点が多く、自然公園法や、自然環境保全法が成り、環境庁が生まれたが、まだまだ不十分だ。

ところで、アメリカ国立公園第二号のヨセミテ渓谷、第三号のセコイア山岳森林地区の生みの親ジョン・ミューアは自然保護の父として国際的に尊敬されている。一九〇四年、日本へも森林植物調査に來たというが、日本への足跡は判っていない。となると、一九一四年五月、ミューアが七十六歳で長逝の少し前に、マルチネズの邸を訪ねた東良三さんは、ミューアに面会した唯一の日本人、しかも私たちが山仲間の方友である。そのとき二十三歳の東青年は、今八十四歳の高齢ながら壮者しのご元氣です。このたびミューアの伝記と自然保護運動の開拓史をまとめ、国立公園協会から発行された。

ミューアが創立したシエラクラブは、現在もアメリカ各地で盛んに活躍の

登山と自然保護の団体だが、先年会員二百人ほどが日本の山を訪ね、JACでお世話した記憶はまだ新しい。東さんが、大正年代からアメリカやカナダ、ことにアラスカの氷河の山々を跋涉されたお話を、当時若かった私は、羨望と憧れの心で聞いたものだ。それもミューアの縁と影響によることをこの著書はくわしく語る。東さんはこれなども国立公園誌や、自然保護誌に幾度かミューアのことを書かれたが、一冊にまとめられてみると今更に、スコッチ魂の通った山岳人で、深い学識と高い人柄を秘め流麗な文章を書き、人々に感銘をあたえた生涯がよく判る。大統領や学者、思想家、はては富豪まで感動させ、自然保護の実績をあげた数々は、実に目覚ましい。が、日本だったらどうだろうと考えあわせると、いささか悲しくならざるを得ない。

環境庁も、前長官大石さんは、自然保護を強くおし進められたが、今度は長官が変わったから、又何とかなりはしないか等、開発側の虎視眈々たる様子が聞えてくる。

ジョン・ミューアが実に飽まざる熱心さで、繰り返し保護運動をすすめ、根本思想を徹底普及した終生の努力。学ばねばならぬ……としみじみ思う。

図書室便り

(昭和47・9)

新刊図書受入報告

朝日新聞社寄贈
(1)朝日新聞社編『探検と冒険』 昭和47

山と溪谷社寄贈
(1)佐竹義輔編『日本の花』 昭和47
文芸春秋寄贈
(1)加藤薫著『雪煙』 昭和47
角川書店寄贈
(1)深田久弥著『シルク・ロード』 昭和47

実業の日本社寄贈
(1)瓜生卓造著『谷川岳鎮魂』
武田直子氏寄贈
(1)武田久吉著『農村の年中行事』 昭和47
山崎安治氏寄贈
(1)クリス・ボニントン著『山崎安治』
『アンナプルナ南壁』 昭和47

沼倉寛二郎氏寄贈
(1)沼倉寛二郎・折井健一編『私たちの山登り』 昭和47
日本山岳会
(1)日本山岳会編『山岳』第一年第三号
『覆刻版』
定期刊行物受入報告
【部報・会報類】

(1)山村民俗の会『あしなな』No. 133
(47・9)
(2)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 64
(47・9)
(3)日本地図資料協会『古地図研究』No. 31 (47・9)
(4)京都山岳会『京都山岳』No. 589
(47・9)

(5)東京管林局『みどり』No. 7 (47・8)
(6)日本山岳会関西支部『関西支部報』No. 24 (47・7)
(7)長野県山岳協会『山岳協会ニュース』No. 25 (47・9)
(8)東京野歩路会『山嶺』No. 509 (47・9)

(9)低山を歩く会『低山』No. 84 (47・8)
(10)神奈川県山岳連盟『つぎの木』No. 26 (47・9)
(11)東京農業大学農友会『年報』(47・7)

会務報告

十月理事評議員会

(六日午後六時本会ホールム)

- △出席者 三田会長 成瀬 吉沢
副会長 中屋 伊倉 近藤 松丸 丹
部 大森 神崎 板倉 堀山 須田
坂下 宮下各理事 織内 村山 金坂
各評議員

議事

・定款改正(案)について

成瀬副会長を定款改正小委員会の長として、素案を作られた織内評議員より説明があり質疑が行なわれた。
主な改正の考え方は以下の通り。
(イ) 実状にそぐわぬ不備を補完する
(ロ) 将来に対しての適合性を高める
(ハ) 役員の任期について
(ニ) 評議員会の役割を重視
(ヘ) 現行定款には細則が全然無いので新たに定めた。なお、定款中より細則に移せるものは移す。
詳細は別紙(略)。この理事会案を二十日の支部長会にはかり総会に提案することになる。

報告事項

△海外問題

- (イ) 日大山岳部(七四年ヤルン・カン峰)推せん状発行の件。承認
(ロ) 立大山の会(ラカボシ) 承認
(ハ) 入国問題に疑問あり、保留
(ニ) R C C IIの文部省補助金推せん状、一部句修正の上承認。
(ヘ) 牧野(平五郎)家より葬儀につき挨拶。

秩父宮記念賞の委員候補の件。

山岳会関係で地学関係者として(和達さんとの交替)田中薫名誉会員を推せん。

(4) 上高地山岳研究所は十月八日に

上棟、地下ケーブル工事を除き年内にはほぼ完成の見通し。

(5) 日山協、都岳連関係報告、略

(6) 図書交換会を実施する。

(7) 国際生気象学会に出席した中島医博が帰国した。

(8) 第二八六回の小集会は千代田公会堂での映画会であったが、NHKとの連絡不手際により『エペレスト国際隊』のフィルムの上映を断られ、急に『マナスルに立つ』に変更したが大幅な赤字を出した。第二八七回は野辺山で三十名の参加者であった。

なお、集委会中間の反省会では、赤字を含めて仲々思うように行かないことを第二八八回の十月二十日の『日本山岳会を考える』のバネル討議に訴え、フンケート調査を行なった上十一月二十日、再度その集計結果をもとに小集会を持ちたい。

丁承

(9) 帰山理事より学生部がなくなり青年懇談会がうまれた経緯について不明確である。学生部が含まれるのかどうか。学生のために理事会の方針をはっきりして貰いたい要望があり、宮下理事と充分打合せよう指示があった。

(10) 指導委より十一月二十三日前後富士山で実施している一般講習会は、雪量、雪質、混雑度、交通の不便との理由で不適当と思われるので、ゴールデンウィーク前後に実施したいとの提案があったが、四十七年度事業のため、なるべく本年度総会前に実施するよう指示された。

ルーム日誌(47年9月)

1日(金)常務理事会

4日(月)集委会

7日(木)書評委員会

8日(金)理事評議員会

11日(月)桜門山岳会OB会

12日(火)図書委員会 青年懇談会

13日(水)学生部委員会

18日(月)集委会

19日(火)学生会

20日(水)山研委員会

22日(金)学生部

25日(月)会報委員会

28日(木)常務理事会

30日(金)青年懇談会

九月(土)岩永信雄氏をかこむ会

九月(中)来室者三五九名

会員異動(47年9月)

終身会員

五三九〇 須田 紀子

退会会員

四四四六 金子 善一

物故会員

一三三三 小平 潔 昭和四七・九・一逝去

二四三三 田部 重治 昭和四七・九・二逝去

一三六九 川喜田壮太郎 昭和四七・九・二七逝去

お知らせ

「冬山の危険」について

指導委員会、集委会、遭難対策委員会、学生部では左記日時に「冬山の危険」についての講演会を催しますのでぜひご参加下さい。
日時 十一月二十日(月) 六時半
場所 岸記念体育館三〇一号室
講師 金坂一郎、広谷光一郎、小西政雄ほか(予定)

冬山登山技術講習会について

例年富士山で開催している登山技術講習会は、五合目までの道路事情や積雪の状況が不安定のため、来春四月開催に変更致します。募集詳細は、二月号「山」に掲載致しますので、奮ってご参加ください。(指導委員会)

忘年会をお忘れなく!!
恒例の忘年会は、十二月二十日水曜午後六時半から本会ホールムで開かれます。各人プレゼントと無記名の手紙をもちよっての楽しいひとときです。もちろん婦人懇談会の面々が集委会員と共同でお世話いたします。

スキー大会
日時 一月十四(日)、十五日(月)
場所 八方尾根中山山荘
主催 集委会、青年懇談会共催
四十八年度現地支部長会議予告

当番支部 北海道支部
場所 十勝岳山麓、十勝岳温泉
開催日 六月十五、十六、十七日
の三日間(二泊三日)
登山コース(十六日)富良野岳、上ホロカメトック、十勝岳の三コースの予定
参加会費 一名七千円程度
計画の詳細は「山」四十八年二月号に発表の予定

第二八四回小集会報告
七月二十日午後六時半から本会ホールムで、一九七一年拓殖大学ヒンズークシユヒマラヤ遠征隊と第一次ヒマラヤ学術登山隊(電通大学)の話を中心に小集会が開かれた。
夏休みの関係で小人数ではあったが内容のある小集会となった。
菊池修身氏が、拓大遠征、とくに山賊におそわれた話をされ、今後の隊は

- (12) 日本山岳協会『登山月報』No. 42 (47-9)
(13) 日本登山協会『山と雪』No. 173 (47-9)
〔雑誌〕
(1) 『アル』No. 175 (47-9)
(2) 『地図』Vol. 10, No. 39
(3) 『岳人』No. 304 (47-10)
(4) 『岩と雪』No. 27 (47-10)
(5) 『山と溪谷』No. 409 (47-10) [その他]
(1) 福島県浅山山岳会『訪華親善登山隊計画書』72
(2) 関西大学探検部『アラスカへの道』
(3) 熊本アルコウ会『創立40年記念会報集録』(47-7)
〔新著海外雑誌〕
(1) 『The Alpine Journal』Vol. 77, No. 321, 72.
(2) 『Alpinismus』72-8.
(3) 『Der Bergsteiger』Jah. 39, August 72.
(4) 『Deutscher Alpenverein』Jah. 24, Heft 4, Juli/August 72.
(5) 『The Himalayan Journal』Vol. 30, 70.
(6) 『Mazama』Vol. 53, No. 13, December 71.
(7) 『La Montagne et Alpinisme』Année 98, No. 88, 72-3.
(8) 『Mountain』No. 22, July 72.
(9) 『Österreichische Alpenzeitung』Jah. 90, Forge 1383, Mai/Juni 72.
(10) 『Panorama of Slovakia』72-3.
(11) 『T.I.A.A.』No. 50, juillet 72.
〔洋書要入報告〕
1. 日本学生カナタ登山隊寄贈
Thompson, J.M. "Aclimber's guide to the Rocky Mountains of Canada" The American Alpine Club. 1966.

じゅうぶん注意が必要であることを力説されたがまったくの話、想像もできないようなことがアフガンの地でおこったことをあますところなく名調子で伝えてくれた。

電通大隊の西山忠成氏は、隊がやとったボーターかシエルバに金庫をあけられ隊の金をとられた話を中心に金の保管運搬方法について興味ある経験談を披露。金はあるべく分散して腹まきに入れよ、もちろん必要以外の金は大使館などに預けるなどしたほうがよい。スチール製鍵付金庫も意味がない、高額紙幣は身につけておくべしなど。

おわりに、シエルバ問題について質疑応答がかわされ、日本でもそろそろシエルバのリストを作ってはどうか（過去の遠征隊の記録を集めて作る案）など、大いに勉強させられる夏の一夜でした。

（集会委）

《付記》

第二八五回以降の報告は次号掲載予定です。

*

あとがき 本年四月以降、名誉会員
武田久吉氏、同牧野平五郎氏、同田部
重治氏、同島山徳成氏をはじめ逸見真
雄氏、川喜田壮太郎氏、小平潔氏等の
相次ぐ逝去の報に接し、本会の歴史
の重みといったものをあらためて深く
感じさせられる今日このごろである。

（坂下）

昭和四十七年十一月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 坂下 心一

（293）七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

ブータン感傷旅行

小方全弘著

〈菊判280頁〉定価980円

森林・草原・氷河

加藤泰安著

〈A 5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話

初見一雄著

〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山

望月達夫著

〈B 6判334頁〉定価960円

山の古典と共に

大島堅造著

〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・蔵山

川崎精雄著

〈A 5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと

坂本直行著

〈B 5判206頁〉定価2,800円

いろいろばた

南会津山の会

〈B 24どり判320頁〉定価1,900円

山日記1972年版

日本山岳会編

〈A 6判368頁〉定価750円

山 岳

日本山岳会編

〈A 5判〉

総索引	1,000円
65年	2,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
61年	1,800円

国立公園カレンダー

国立公園協会編

〈A 5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編

〈B 6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集

戸野昭・朝倉宏編

〈A 6判126頁〉1集240円・2集280円

シブトンの自叙伝

未踏の山河

大賀二郎・倉知敬訳

〈A 5判440頁〉定価1,900円

日高山脈

北大山の会編

〈菊判362判頁〉定価2,200円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著

〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

〈A 変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記

京都大学学士山岳会編

〈A 12取変型判170頁〉定価1,200円

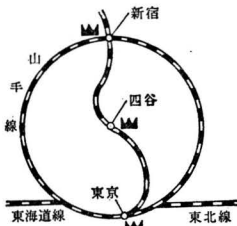
登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編

〈A 5判350頁〉定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736●買いやすい
山の店●北へ来たら
山の店●フレッシュな
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

なまぐ、なんにも
持たない方がいい
けど、どうしても
要するものがある。
なにしろ人間ですから
そして、登山ですから
どうしても必要なもの
をこしらえてやる
責任はもっています

かたるギンテイ
でんや 28128456
中央区・八重洲4丁目1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON; 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
 東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
 大阪店・北区豊根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
 福岡店・須崎町1-4 (28) 34440

